

村田先生を送る言葉

野村和宏

村田純一先生、神戸外大での長年に渡るお勤め、お疲れさまでした。村田先生の隣に研究室をいただけたことで、毎日のように顔を合わせていました。英米学科では同じ語学セクションに所属し、その中でさらに英語教育グループのメンバーとして一緒に仕事をすることも多く、本当にお世話になりました。

村田先生は東京外国語大学卒業後に旭川の高校で教え、その間、さらに筑波大学大学院で英語学と英語教育学を修め、ちょうど外大が学園都市キャンパスに移転し新たな歴史を刻み始めた1986年に新進気鋭の若手研究者として本学に着任、2019年3月末日をもって定年退職に至るまで、33年に渡り本学の英語教育を支えてこられました。

村田先生は長年にわたり、第二言語教育、特に日本での英語教育に関わる様々な課題について、心理言語学的、応用言語学的、社会言語学的、認知言語学的なアプローチを用いながら多面的な角度で精力的に研究を進めてこられました。具体的には、第二言語教育の目的・目標、第二言語の効果的な学習法・教授法、コーパスに基づく英語の用法・語法、英語における概念的メタファーの研究とその第二言語教育への応用という四つの幅広い領域にわたっています。

私は外大の学生、院生時代には、英語教育科目を当時、外大の英語教育学の中心であった河野守夫先生にご指導いただき、大学院を出てからは神戸外大出身の研究者によって構成された六甲英語学研究会に参加していました。その研究会が村田先生との最初の出会いだったと記憶しています。また私自身、1988年から1997年の10年間、他大学に勤めながら外大の非常勤講師もしていましたので、外大英米学会の会合でも村田先生にお目にかかっていました。六甲英語学研究会は、午前は語法研究や英語学関係、午後の部は英語教育関係の集まりでしたが、その後、午後の部は独立し、ことばの科学研究会となりました。この研究会は河野先生と村田先生が中心となって神戸外大の応用視聴覚教室で開催していて、私も会員として参加していました。研究

会はさらに発展し、現在はことばの科学会としてさらに評価を高めています。村田先生は河野先生やことばの科学研究会の中心メンバーと共に編集委員として研究の成果をまとめ、三省堂から『ことばと認知のしくみ』を出版されました。学会活動では関西英語教育学会(KELES)で役員を歴任するなど活躍され、二期にわたり会長も務められたことでその信頼の厚さが伺えます。

外大での授業では、村田先生は学部および第2部において、専攻英語の英作文、英文法、英語教育法、研究演習(ゼミ)など多数の科目を長年にわたり担当し、本学における英語学・英語教育学の教育を支えてこられました。作文や文法、英語教育法では多くの文献から資料を収集して独自の教科書を作成し、自ら印刷製本して使用されました。授業の中で学生が提出した課題に対しては単に提出させるだけではなく、いつもきめ細やかな添削指導を実践しておられる様子を研究室でよく拝見しました。

また教育実習関連では、実習に行ってきた学生のレポートから丹念に教育現場の変化を拾い出し、資料としてまとめて次年度の事前指導・事後指導に生かすなど、理論に偏ることなく常に現場の動きを敏感にとらえていました。さらに教育実習に行く前の学生のために模擬授業セミナーを始められました。そこではわざと出来の悪い生徒役を演じて困らせてみる一方で、不安を覚える学生には「大丈夫だよ」と励ますなど、懇切丁寧な指導を続け、実習中も実地視察や巡回指導を多く行ってこられました。こうした親身になった指導助言が、学生たちの教育実習での充実した成果や高い教員採用試験合格実績につながっていることは言うまでもありません。

さらに大学院では、英語学専攻において教授法の授業を担当することに加え、現職教員向けの英語教育学専攻の創設に尽力されました。英語教育学専攻が2004年に創設されて以来、初代の専攻代表を務めるなど、まさにその中心メンバーとして指導を牽引し、本学の英語教育リカレントコースの評価を内外に高めてこられました。修士論文を執筆する院生に対しては毎週末に研究室で指導を続け、その結果として、院の修了後も村田先生のことを師匠と呼んで慕い続けている院生もいます。学部や2部のゼミでも英語教育を研究したい学生はもちろん積極的に村田ゼミを志望するのですが、一方、なかなか所属するゼミが決まらない学生(学生の間では「ゼミ難民」と呼ぶらしい)も幅広く受け入れて指導されました。明石海峡大橋を見渡す自宅にゼミの学生を招いて奥さまの家庭料理を囲むパーティも学生たちがいつも楽しみにしていたとのことでした。

研究室には多くの研究書と共に中学と高校の検定教科書がずらりと並べられています。村田先生ご自身も高等学校英語検定教科書の執筆編集に携わ

ってこられる中で、教育研究の成果を生かされました。文部科学省の学習指導要領にある「英語の授業は基本的に英語で行う」という記述がよく議論になりましたが、英語だけで指導することのメリットとデメリットについても理論的にも実践的にもよく理解され、両方をバランスよく用いた指導法を、自ら「チャンポンメソッド」と名付け、さらにこれこそが「チャンピオンメソッド」だ、いやいや実は「ちゃらんぼらんメソッド」だと言うなど、慎ましやか、というかお茶目な面も持っておられます。

学内教職員や卒業生、ゼミ学生など合わせて100名を優に超える参加者となった最終講義は「Learn English and Know Thyself as a Japanese — 教師生活43年を振り返る」と題し、自らの教員生活を振り返り、英語教師として自分を見つめ学ぶことの大切さを述べられました。開始早々あつという間に村田ワールドに聴衆を引き込み、その軽妙洒脱な語りやささまざまなエピソードは絶えず聴衆の笑いを誘っていました。しかし時のメタファーの分析やcouldの用法の話など、文法研究、語法研究の観点からの分析では英語学者としての切れ味を見せ、われわれを唸らせてくれました。常に学び続ける謙虚な姿勢は、今でもいつもイヤホンで英語を聴いてリスニングの訓練を続けていることや、研究室に高く積み上げられた数多くのペーパーバックにも表れています。

英米学科の仕事では、村田先生は2007年度と2008年度に英米学科代表を務められ、その際に新たに非常勤講師との懇談会を新学期に開催することや各専攻科目のガイドラインの策定を本格的に進められました。授業科目担当者を決めていく中で、どうしても担当者が見つからない場合、学科の窮状を見て率先して手を挙げて引き受けられ、学科教員で分担していく学務についてもいつも積極的に担当されました。この「困った時の村田頼み」は相変わらず健在で、定年退職後も無理をお願いして大学院科目のみならず学科の専攻英語についても、他に代えがたい存在として継続して担当をお願いすることになりました。定年後には北海道に戻ってご家族でゆっくり過ごす予定をしておられたのではないかと思います。もう少し力を貸していただけばと思っています。北海道出身ということでももちろんスキーは得意ですが、スポーツでは他にテニスに長けており、外大のテニス部の顧問も務め、毎週木曜日の午後はテニス日ということでテニス仲間やクラブの学生たちと真剣にテニスに取り組んでおられました。最近はクラブのメンバーに強い学生が増えてきてなかなか勝てないと少し寂しげに語られたのが印象的です。

研究室が隣になってから15年間お世話になりました。お酒も好きな村田先生と一緒に飲むのは楽しく、謙虚で人間味あふれる懐の深さ、思いやりの

温かさ、教育研究者としての熱さには心打たれました。研究室の書棚には「北海道の寒さにも負けへんくらいあたたかい教師」という筆書きが飾ってあります。さまざまな場面で熱い教師としての村田先生と接することができました。村田先生との出会いは自分の教師生活の中でいつまでも大切にしていきます。村田先生ありがとうございました。